OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ここ」は「何所か」、「何所か」は「ここ」、あなたでも私でもない身体のダンス : 勅使川原三朗《ガラスノ牙》
Author(s)	玉地, 雅浩
Citation	臨床哲学. 2007, 8, p. 125-126
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜批評＞

「ここ」は「何所か」、「何所か」は「ここ」、あなたでも私でもない身体のダンス
――――勅使川原三郎≪ガラスノ牙≫

玉地　雅浩

かつて大きなガラスの破片をコスチュームいっぱいに突き刺して踊った勅使川原が、今度は舞台に敷き詰められたガラスの海の上で、その周りで踊る。大怪我をする危険に切迫した身体は既にどこかに逃げてしまい、危機に直面した身体がようやく立ち現れたかに見えた時には、それは誰かの身体になっている。そんな幾つもの身体が重なるダンスである。勅使川原が言うように「切羽詰った精神を、身体を追い込む時、空間から時間が解放される」そんな公演だった。

のっけから幅 2m、長さ 15m 程のガラスが敷き詰められた上をゆっくりと、雲の上を歩くように勅使川原が移動する。シルエットが止まっても肢体はまだ動いている。踏みしめられたガラスが砕ける音がすると、さらに踏みしめていく。その動きに少しずれた音が重なると、今砕けたガラスか先に砕けた音なのか分からなくなる。どこか遠くから聞こえた音なのか今ここで割れている音なのか曖昧になっていく。肢体の動く方向、重心のかかり方、シルエットが微妙にずれながら、ガラスが砕ける音、舞台のきしみや響きなどが重層的に聞こえる。踊る身体に、舞台に、会場に幾つもの時間のズレが生じ、幾つもの時間に侵犯された身体は、同時にそこから逃れようとすることを余儀なくされる。自分の身体としては、あなたと私の身体としては見ることができないダンスが繰り広げられるからである。

それは第二幕でも追求される。舞台中央の 10m 四方のガラスの海で、勅使川原はタップダンスを踊るかのようにガラスを踏みつけていく。砕け散るガラス、幾重にもガラスの割れる音が時間感覚のズレを生じさせる。≪ルミナス≫の製作過程を追った番組で「時間の前後を入れ替える、そんな時間を壊すようなダンスを踊りたい」と言っていた勅使川原の言葉は、この公演でもより純化したかたちで見ることができた。優しいフワフワとした

音楽と、ゆったりと踊っているのとは裏腹に、ガラスの上でのステップは時折足を滑らしてしまう。滑りかけた身体を見た体は思わず息を呑み、お尻を浮かせ、体に力が入り、時には見ていられずに体を捻ってしまう。そんな滑れば大怪我が必定の場面だからこそ生まれる動きや、もはや制動できなくなった身体をもぐっと押さえ込んだままのダンス、自然と転倒を防ぐ身体の反応が一向に現れない。なのにバランスを崩したり、表情が変わらないから、見ているわれわれは、かえってハラハラする。ガラスに滑って加速度が加わった動きなのに反比例してスロモーションのように動きが流れていく。前のめりになりながら見ているから勅使川原の動きに呼応できない。行き過ぎたり、掴み損ねたり、そんなやりとりのなか、滑りながら踊り続ける勅使川原の身体は、他の誰かの身体を踊っているかのようである。やがて勅使川原はそのガラスの上に寝転んでしまう。「ガラスに限らず物質には、それぞれの時間感覚がある。土を握る、石に触れるといった行為から人は、触れている時間よりも長い時間を感じているはずです。そこに僕は興味があるのです」と言っていた勅使川原のその時間感覚に、最後まで寄り添うことはできなかった。

いつ見ても勅使川原のダンスは、リズムが音だけではなく、体の中から、動きから作られることを実感させられる。今回、初めて踊りの途中にささやく話し声が挿入されていたが、聞き取るとはできない。さらに、表情ゆたかに踊り、時にコミカルにも見える場面があった。これらから浮かび上がってくるものは、既にそこではなく、何所かに移ってしまっており、掴み取ることができない。だから、未だここから離れようとしない、あるいは、この身体であろうとする身体に対して、「果たしておまえは、そこからどうやって逃げることができるのか？」そう問われているようなダンスだった。